

特別寄稿

佐伯藩主奉納の鳥居

玖珠町に現存する二基について

玖珠町 足立 金三 (六十五才)

(はじめに)

謹んで新年の御慶ひ申し上げます。さて御地の藩主の奉納された鳥居が二基ありますので、私素人で出来がまがいけれども、素人写真をお送り申し上げます。御参考にはなりますまいけれども、どうぞ御笑覧いただきまして幸いです。

昭和五十一年一月十四日

足立 金三

佐伯史談会御一同様

(编者云々)

ご存知申し上げない足立さんかみ、右のような前書ははじまる以下の二葉の写真をかかげての調査・報告が手に入りましたのは、一月の二十日すぎであつた。

実は高取先生の鳥居調査以前に、森野にこの鳥居のあることを知っていて、折がらば現地調査を考えていたところ、この鳥居の足立さんから正確・丁寧なお知らせをいただき感激であつた。写真は横写りとどめるが、文字・文章はすべて原文のままである。

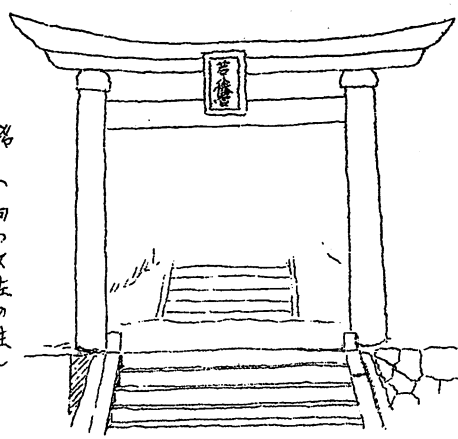
(一) 毛利高定公奉納・若八幡宮鳥居

(元果社 若八幡宮 元宮)

銘 (向って右の柱)

奉寄進 玖珠郡帆足郷 八幡宮御寶前

元禄十六年(己未)十二月吉祥日



銘 (向って左の柱)

豊後国佐伯城主 毛利周防守 藤原高定

昭和四十六年八月二十六日に上部が落壊し、同十月これを復元しました。これは五、六尺の所に、自衛隊の重戦車の通る道路がありますので、しんどうでいつかバランスがくるのでしよう。

(注一) 毛利高定は森藩主久留島通清の第三子、初名代徳、又助十郎、初名高定、後高寛と改め、更に高慶と改む、即ち佐伯藩第六代藩主である。付記すれば是れ高久の久留島通清の第三子、嗣子なき故弟が再び佐伯藩に迎えられたわけである。

(二) 毛利高恭公奉納・三島神社御旅所鳥居

此の鳥居は見られる通り桁(へら)の両端が、柱の外に出していません。また付けた跡もありません。

(注二) 元禄十六年(己未)の、(注一)にもある通り癸未(みづうみ)の己未(みづうみ)が正しいが、足立氏は眼会かどこか鳥居には乙未(ひつじ)と誤った(注一)に訂正しているとの逸事であった(注二)にてそのまま掲げた(注三)

(二) 毛利高恭公奉納・三島神社御旅所鳥居

(元集社、妙見宮ともいう)

銘 (向って右の柱)

高定 六世孫 毛利安房守 藤原高恭 再建

(目柱裏側)

加藤茂弘 敬書

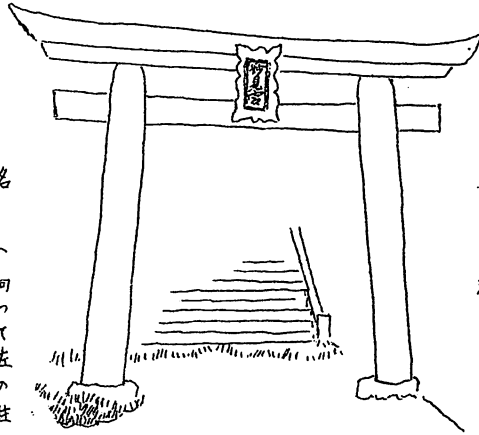
安政六祀年九月再建 統理 小松信圓

黒川重俊

穴井弘由

補助 氏子中

石工 田坂正幸



銘 (向って左の柱)

元禄十六癸未年十二月吉祥日

(同柱裏側)

豊州佐伯城主 毛利周防守 藤原高定

此の鳥居は、大正五年にどこから現在地に移した様  
です。別款添付の碑文が鳥居の右向うにあり、私には読  
めませんが、そのままうへしました。

此の位置は前の鳥居から一歩位は離れた所にあります  
が、道路が同じ自衛隊の演習地に行く道ですから、多い  
時は三十台以上の戦車が通ります。そして又此の鳥居は

道路面であり、丁度カーブにあるので  
おぶない所です。

(別款) 鳥居記念碑 碑文

右華表実係佐伯藩主毛利高定公所献

公爲當藩主久留島氏出幼而有雄圖出

方藤毛利氏建華表産土神社前以賽成

其宿志云今茲當拓地移社有志胥謀移

建以資莊嚴乃勒其氏名以伝不朽云爾

(碑の裏面に)

大正五年九月廿五日 落成

(以上)

(参考) 古碑文の試読

右の華表(鳥居)は、実に佐伯藩主毛利高定公の献す  
る所に係る。

公は当藩主久留島氏の出たり。幼にして雄圖あり、  
出でて方に毛利氏を襲い、華表を産土神社の前に建  
て以て賽し其の宿志を成すと云う。

今茲に當に地を拓き社を移すべし。有志胥謀り移  
し建て、以て莊嚴に資す。仍ち其の氏名を勒み、以  
て不朽に伝えんと、爾云う。

(羽柴)

報告

米水津村に文化財愛好会が発足

三月六日 午後二時から 村公民館図書室で

主唱 高橋徹氏 指導 高宮照夫氏(学生会員)

大先輩 山田平之丞先生(敬之)の母村米水津村に氏五つの浦がある。

米水津浦を深々と抱いて、その歴史や文化にはユニークなもの

をもっているが、新しい組織による協力研究によって、山田先生の

業績にさらに次々と上積することを期待したい。

